しろあとだより

第 21 号
2020 年 12 月
高槻市立
しろあと歴史館

目　次

「芥川山城と芥川城 - 初出の典拠と築城年代について - 」
中西裕樹 ……1
「元亀四年の足利義昭の挙兵と淀川水系の城郭」中西裕樹 ……5

芥川山城と芥川城 - 初出の典拠と築城年代について -

中西　裕樹

一　はじめに

芥川山城とは、本市の三好山(大字原。標高一八二・六九ｍ)に所在する摂津国最大の山城跡の通称である(遺跡名は芥川山城跡)。摂津・丹波等の守護をつとめた細川氏(京兆家)が築城し、天文二十二年(一五五三)以降は畿内を支配した三好氏の居城となった。永禄十二年(一五六九)に城主の和田惟政が高槻城に移って以後は、徐々に機能を停止する。

一方、城跡から南へ約三・五㎞離れた西国街道の芥川宿(高槻市)の一画に芥川城の伝承地(遺跡名は芥川遺跡)がある。芥川山城という通称は、この平地の芥川城と区別する便宜上の名称で、同時代の記録には「芥川城」「芥川」「城山」として登場する。

昭和五十二年(一九七七)刊行の『高槻市史』第一巻本編Ⅰ(以下『本編』と略)(1)によれば、芥川城は永正二年(一五〇五)に確認され、芥川山城は永正十七年に築城されたとする。ただし、その典拠を収録した昭和四十八年刊行の『高槻市史』第三巻史料編Ⅰ(以下『史料編』と略)(2)では、芥川山城の築城を記述する『瓦林正頼記』の年次比定を誤っていた(3)。また、永正二年の芥川城の典拠とされた『宇津山記』の先行研究を今回見直したところ、以下述べるようにその年次比定も誤りであることが判った。

『本編』と『史料編』は、芥川山城と芥川城を学ぶ基本文献で、著者も久しく依拠してきた。また、現時点で芥川城の存在を示す同時代の記録は『宇津山記』のみであり、年次の誤りは両城の関係へ再考をうながすものともなる。小文では、あらためて芥川山城と芥川城の初出とされてきた典拠の年次比定、そして築城年代について整理し、その上で両城の存在を見直してみたい。

二　『本編』における両城の初出

『本編』では、「Ⅴ　戦国動乱と天下統一」の三浦圭一氏の執筆部分において、主に芥川山城と芥川城が取り上げられた。著者なりに要約すると次のとおりである。

延徳二年(一四九〇)十二月、京兆家当主の細川政元は摂津国の茨木(茨木市)へ下り、西国街道の芥川宿近辺で家屋を造営した(『後法興院記』)。この行動は、国人芥川氏の没落後に放置された要地芥川の再建で、そこに配置されたのが摂津国能勢郡(豊能郡)を本拠とする能勢頼則であった。永正二年(一五〇五)正月中旬、有馬温泉に向かう途中の連歌師宗長は芥川城に立ち寄り、頼則が興行する連歌会に参加した(『宇津山記』)。これが芥川城主能勢氏の初見である。なお、芥川城は、すでに国人芥川氏が構えていたとされる。

永正四年の政元暗殺後、能勢氏は芥川城を離れるが、永正八年八月末には京兆家家督を確保した細川高国の下で頼則の復帰条件が整い、永正十三年の正月下旬か二月初め頃、再び有馬温泉に向かう宗長が芥川の能勢頼則の「新城」で「うちなひき　いつこかのこる　春もなし」という祝いの句をつくった(『那智籠』)。『本編』は、この城を「芥川新城」と呼んでいる。なお、有馬温泉からの帰路にも、宗長は「芥川」での千句連歌会で「桜さく　春かせかほる　柳かな」と発句している(『那智籠』)。

永正十六年に京兆家の家督をめぐる高国と細川澄元の争いが激化し、翌十七年には「芥川城の強化」が必要となって、高国が大字原の城山(三好山)に築城し、昼夜兼行で五百人～三百人が工事に動員されたという。(『瓦

林正頼記』)。この城は「三好山」という名称から後の三好長慶の居城と思われるとされ、『本編』は「芥川山城」と呼んだ。大永三年(一五二三)、宗長は「城山」で能勢源五郎が主催する連歌会で「くれてなを のとけき年の ひかり哉」と発句しているが、この「城山」とは芥川山城を指すとしている。

しかし、後に澄元の子の晴元が勢力を強め、大永七年に高国が没落すると、高国方の摂津の諸城主が離散し、芥川山城の能勢氏も高槻の歴史から去った。やがて畿内の実権掌握者となった晴元は天文二年(一五三三)に芥川城へと入り、京都への影響を強めて「芥川政権と呼んでもよいほど」と形容される。ただし、この芥川城の場所や普請・造営内容などは一切明らかではないとされた。

三 『本編』が示す城郭の変遷と評価

『本編』が記述した城郭の変遷は次のようになる。国人芥川氏が構えていた芥川城を守護細川政元が再興し、被官能勢氏を城主に配置した。永正十三年には細川高国の下で芥川に「新城」が構えられ、やはり能勢氏が配されるが、同十七年に至って後の三好長慶の居城となる芥川山城が築かれた。しかし高国とともに能勢氏は没落し、新たな家督となった細川晴元は芥川城に入ったが、この城の詳しくはわからないという。

現在は、晴元の芥川城を芥川山城と解釈するのが通説になったが、これは一九九〇年代に入って増加した山城における発掘調査の結果をふまえ、山城の拠点化が城郭史に位置付けられたためである。城館研究は一九八〇年代に本格化するが、『本編』はそれ以前の刊行であり、当時は武家の拠点は平地に営まれ、山城を臨時的な利用とする「根小屋式城郭」の考え方が一般的であった。

例えば、昭和四十二年(一九六七)の『日本城郭全集』九巻において、芥川城は芥川氏から細川氏、三好氏、和田氏までの歴史が扱われている(4)。一方で、別に芥川山城に該当する「三好山城」の解説があり、こちらでは永正五年(一五〇八)の細川高国による築城(年次は誤認か)、以降の軍事的な利用と三好氏の改修が想像されるという記述にとどまる。

歴史学としての城館研究は、昭和五十四年度の村田修三氏による日本史研究会大会報告「城跡調査と戦国史研究」が嚆矢となった(5)。そして同年の『歴史読本』七月号の村田氏と作家の南條範夫氏、哲学者の上山春平氏との対談「戦国の山城と群雄 - 近畿の要衝・芥川城をめぐって -」では「三好山城跡」として村田氏の手による縄張り図、つまり地表面に残る遺構の概要図(縄張り図)が掲載され、三好山に残る遺構や規模などから山城の拠点化が話題にされている(6)。

そして、昭和五十六年の『日本城郭大系』第十二巻において、「芥川城」「芥川山城」の解説に同じく村田氏による芥川山城の概要図が掲載され、細川高国以降は主に芥川山城が利用されたと評価され、以降の通史が取り上げられた(7)。

このような研究動向をふまえると、『本編』が晴元段階の芥川城を不詳としたのも致し方ない。むしろ、三好長慶の居城として芥川山城を取り上げた点を積極的に評価すべきと考える。

四 初出の典拠と築城年代

さて、『本編』が両城の初出とした典拠について、引用元となった『史料編』の年次比定を確認すると、細川政元が能勢氏を配置した芥川城の初出は『宇津山記』(史料番号・中世二五五)の永正二年(一五〇五)正月中旬、能勢氏が復帰した「芥川新城」は『那智籠』(史料番号・中世二八〇)による永正十三年の正月下旬か二月初め頃、細川高国による芥川山城の築城は『瓦林正頼記』(史料番号・中世二九七)による永正十七年十月とされている。

このうち、『本編』では、連歌師宗長が「芥川新城」で詠んだ「うちなひき いつこかのこる 春もなし」との句を『那智籠』から直接引用し、新城を構えた能勢頼則を祝ったとしている。ただし、『史料編』での『宇津山記』収録部分にも、「芥川の城」における能勢頼則興行の連歌会での発句として「うちなひき いつこかのこる 春もなし」とある。年代が異なる連歌会で全く同じ歌が詠まれたことになり、違和感がある(8)。

重松裕巳氏によれば、『宇津山記』は永正十四年に宗長がまとめた回顧と身辺雑記である(9)。記事は「永正はじめ」にはじまり、収録年次は永正十四年までで、該当の句の収録部分は永正十三年とされる。一方、『那智籠』は永正十二~十四年の句を所収したもので(10)、『史料編』の収録部分でも五つ目前の発句に「永正十三年正月六日」と記載されることから、

宗長が「芥川新城」で連歌を詠んだのは同年の出来事とすべきだろう。

また、鶴崎裕雄氏による宗長の研究によれば、永正元年の宗長は故郷の駿河国で国主今川氏親のために動き、翌年六月に上洛に向け駿河を出発、八月以降に帰国している(11)。この宗長の行動からは、永正二年正月に芥川城を訪れたことは考えづらい。

以上をふまえると、『史料編』による『宇津山記』の年次比定は、永正十三年正月の誤りで、「うちなひき いつこかのこる 春もなし」との句は『那智籠』と同じく「芥川新城」で詠まれたことになる。

「芥川新城」について、『本編』の「Ⅴ 戦国動乱と天下統一」では詳細にふれられなかったが、同じ三浦圭一氏が執筆を担当した「Ⅳ 室町時代の高槻」の「武士と文芸」での言及では「どこにあったか、知るよしもない」としつつ、芥川氏の館とは別の城で細川政元の北摂支配の拠点に繋がるとも記述されるため、おそらく三浦氏は「根小屋式城郭」の考え方にならい、芥川宿近辺の平地に営まれた芥川城の後継にあたる城館と理解していたと思われる。

続いて、芥川山城の初出について、『史料編』は『瓦林正頼記』を永正十七年十月の築城の記事としている。『瓦林正頼記』は軍記物であるが、一定の信憑性が認められている(12)。『史料編』での芥川山城にかかる引用部分は、次の通りである。

其後色々ノ扱ヒトモ有テ、播州ト京ト和睦ニ成トハ申セトモ、底ニハ無由断、其外四国モ大略御敵也、当国ニ可然城無テハ不可叶トテ、国守ハ上郡芥川ノ北ニ当リ、可然大山ノ有ケルヲ城郭ニソ構ヘロケレ、昼夜朝暮五百人・三百人ノ人夫、普請更ニ止時ナシ

『瓦林正頼記』の内容は、『不問物語』と重複し、こちらには独自の記述が見られるとともに、高い信憑性が指摘されている(13)。築城にかかる部分は次のとおりである(14)。

去間、其後種々調法共有テ京都与播州モ和睦ニハ成ケレ共、更油断ハナカリケリ。四国モ大略御敵也。当国ニ可然城郭ナクテハ叶マシトテ、国守ハ上郡芥河之北ニ当テ自昔勝手明神ヲ奉勧請ケル。太山有可然散所也。名詮又目出シトテ、昼夜朝暮五百人三百人之人夫ニテ普請要害止時ナシ。此折節、出雲之国住人馬木伯耆守繁綱、西国一之要害之上手也。任彼意見、屏鹿垣ヲ緒堀ヲ堀陣屋ヲ被造、櫓ヲアケ同木石弓惣而構へ之為体、以言難宜。「万一敵方出帳ス共、此構へ一万人之合力ニ可向」トソ万人申アヘリケル

二つの記録を比べると、『不問物語』の方が城地に勝手明神があり、出雲国の馬木繁綱の指導に基づき城内の施設が構えられたとするなど記述の詳しさが際立つが、同一の築城を述べていることに間違いはない。『不問物語』の記述は下巻の「廿六 摂州所々構城郭之事」の標題に収められ、標題部に年次の記述は無いものの前の標題「廿四 御殿造営之事」が「角テ永正十二年」からはじまり、そもそも『不問物語』の記述年代は永正十四年までとされる(15)。芥川山城の築城は、この間の出来事とみるべきで、『史料編』による永正十七年の年次比定は誤りとなる。

ここで想起したいのが、先の『宇津山記』『那智籠』における「芥川新城」の初出が永正十三年正月に比定できた点である。「新城」という表現から、築城間もない城郭であることは間違いなく、時期は『瓦林正頼記』『不問物語』での芥川山城の築城記事に極めて近い。「芥川新城」は、細川高国が築いた芥川山城と同一の城郭と見做すのが自然だろう。つまり、『本編』が永正二年の芥川城、永正十三年の「芥川新城」、永正十七年の芥川山城の築城を示すとした典拠は全て芥川山城の記述であり、おそらく築城は永正十二年にはじまり、翌永正十三年正月までには連歌会が開かれるまでに施設が完成していたと解釈すべきである。

五 まとめ 両城の存在

繰り返しになるが、著者は、久しく『史料編』『本編』に依拠し、典拠の年次比定を疑わなかった。中世文学の研究では、早くに『宇津山記』『那智籠』の内容への年次比定がなされており、この点は猛省したい。今さらになるが、おそらく『史料編』の『宇津山記』への年次誤りは、「永正はじめ」からはじまる記事を日次記のように解釈した結果であるように思う。

芥川城にとって『宇津山記』は、現時点における唯一の同時代の記録であった。芥川宿近くに国人芥川氏の拠点があり、京兆家の細川政元がテコ入れをしたという場の歴史は変わらない。この延長線上で、著者も『本編』が述べる芥川城の存在を理解してきたが、『宇津山記』が芥川山城を示すと判断された以上、芥川城の存在を証明する根拠は脆弱になったと言わざるを得ない。

近世以降、芥川宿近くには城跡が伝承されてきた。実は、この伝承についても検討の余地がある。例えば摂津国の名所を描く大絵図のうち、寛延元年(一七四八)の大絵図では、若干場所が異なるものの、芥川山城跡の麓に位置する「城山」集落とセットとなる「古城」の表記がある。一方で、芥川宿近くに城跡の記載は確認できない。

天保七年(一八三六)の大絵図になると、先の古城の場所に「松永久秀古城」との記載がなされ、城山集落とともに、近くに山麓一帯の地域名である服部村の名も記される。芥川宿の北には「芥川氏ノ古城」が記載されるようになるが、他にも寛延元年に記載されなかった城跡が確認できる(15)。この間の古城に対する関心の高まりがうかがえるが、一方では城跡が創出された疑いも想定しなければならない。

元禄十四年(一七〇一)の地誌『摂陽群談』の巻九「城郭部」には、松永久秀の築城とする「服部古城」がある。近世村の範囲として、芥川山城は城山を含む原という村に属するが、山麓の地域名を冠した「服部古城」が芥川山城を指す可能性は高いように思う。天保七年の大絵図は、この記載を受けたものではないだろうか。一方、『摂陽群談』では芥川宿近くの城跡伝承を記していない。また、享保二十年(一七三五)の『摂津志』の芥川城は「山城垣内」にあるとされる。これは「城山垣内(集落)」の間違いではないだろうか。

伝承が間違いというつもりはないが、人々の記憶として確実に留められていたのは芥川山城であった。「はじめに」でも述べたが、芥川山城は数多くの同時代史料に登場し、そこでは「芥川城」「芥川」「城山」と表現されている。今後は、城跡にふさわしい呼称についても、議論を成すべきであるように思う。

【註】

(1)『高槻市史』第1巻本編Ⅰ(高槻市、一九七七年)。

(2)『高槻市史』第3巻史料編Ⅰ(高槻市、一九七三年)。

(3)著者は、高槻市立しろあと歴史館特別展図録『三好長慶の時代　「織田信長　芥川入城」の以前以後』(同館、二〇〇七年)において、『史料編』に依拠して永正十七年という築城年代を記述した。その後、仁木宏・福島克彦編『近畿の名城を歩く』大阪・兵庫・和歌山編(吉川弘文館、二〇一五年)の「芥川山城」では『瓦林正頼記』の該当記事を永正十三年とし、現在は永正十二～十三年の築城という見解に至っている。

(4)北本好武「芥川城」「三好山城」(大類伸監修『日本城郭全集』九巻、人物往来社、一九六七年)。

(5)村田修三「城跡調査と戦国史研究」(『日本史研究』二一一、日本史研究会、一九八〇年)。

(6)南條範夫・上山春平・村田修三「戦国の山城と群雄-近畿の要衝・芥川城をめぐって」(『歴史読本』第二四巻第九号、一九七九年)。

(7)中村博司「芥川山城」(児玉幸多・坪井清足『日本城郭大系』第一二巻、新人物往来社、一九八一年)。

(8)『本編』「Ⅳ　室町時代の高槻」の「武士と文芸」では、永正二年に宗長が芥川の「新城」で「うちなひき　いつこかのこる　春もなし」の句を詠んだとして『宇津山記』『那智籠』を引用している。異なる年次を比定する記録を同一年代で取り扱っており、混乱した解釈が生じている。

(9)重松裕巳「解題」(同氏編『宗長作品集〈日記・紀行〉』、古典文庫第四四三冊、一九八三年)。

(10)重松裕巳「解説」(同氏編『那智籠〈広島大学本〉』、古典文庫第三七九冊、一九七八年)。

(11)鶴崎裕雄『戦国を往く　連歌師宗長』(角川書店、二〇〇〇年)。

(12)鶴崎裕雄「「不問物語」と河原林正頼」(同氏『戦国の権力と寄合の文芸』、和泉書院、一九八八年)。

(13)末柄豊「『不問物語』をめぐって」(『年報三田中世史研究』一五号、三田中世史研究会、二〇〇八年)。

(14)和田英道「尊経閣文庫蔵『不問物語』翻刻」(『跡見学園女子大学紀要』第一六号、一九八三年)。

(15)註12。

(16)註3『三好長慶の時代』。

元亀四年の足利義昭の挙兵と淀川水系の城郭

中西　裕樹

一　はじめに

元亀四年（一五七三）三月、高山飛騨守と右近の親子は、高槻城（高槻市）を城主和田惟長から簒奪する変事が起こすが、それは将軍足利義昭の織田信長に対する挙兵の只中のことであった。この事件について、主に著者は和田氏と高山氏の権力基盤の視点から取り上げてきたが(1)、時期的には義昭周辺の軍事動向との関わりから検討の余地があると考える。

周知の通り、以後の義昭は信長との戦いに敗れて京都を没落するが、結論を述べると、表題で示したように義昭方の城郭は淀川水系を押さえるような分布を示す（次頁の図1参照）。小文では、この元亀四年の挙兵の場となった城郭とその主体を取り上げるとともに、義昭方から見た当時の高槻城の位置付けを考えてみたい。

二　湖南での挙兵と城郭

元亀三年（一五七二）の年末まで、義昭と信長は協調関係にあったが、西へと軍勢を進める武田信玄と朝倉義景、本願寺顕如が連携する中、本願寺勢力が近江国の西部を調略した。そして浅井長政が義昭に接近し、京都に接する近江国南部（湖南地域）の志賀郡（およそ大津市域）を制圧する。義昭の家臣には、所領をめぐり信長方へ不満を抱く者が多くいた。結果として、義昭は敵方の松永久秀や三好義継を糾合し、翌元亀四年二月から義昭方の勢力が挙兵する(2)。

『信長公記』によれば、信長は義昭に和談を願うものの、反対に義昭は「光浄院・磯貝新右衛門・渡辺舛の者」に挙兵を命じ、彼らは「才覚」によって志賀郡の今堅田に軍勢を入れ、同じく石山に「取出の足懸り」を構えた(3)。対する信長は柴田勝家と丹羽長秀、蜂屋頼隆、そして明智光秀に攻撃を命じた。以降の動きを次のように『信長公記』は記している。

二月廿日に罷立ち、廿四日に勢田を渡海し、石山へ取懸候。山岡光浄院大将として伊賀・甲賀衆を相加へ在城なり。然りといへども、未だ普請半作の事に候間、二月廿六日降参申し、石山の城退散。則、破却させ、二月廿九日辰剋、今堅田へ取懸け、明智十兵衛囲舟を拵へ、海手の方を東より西に向つて攻められ候。丹羽五郎左衛門・蜂屋兵庫頭両人は、辰巳角より戌亥へ向つて攻められ候。終に午剋に明智十兵衛攻口より乗破り訖。数輩切り捨て、これに依って志賀郡過半相静まり、明智十兵衛坂本に在城なり。柴田修理・蜂屋兵庫頭・丹羽五郎左衛門両三人帰陣しなり。

元亀二年九月に行われた比叡山焼き討ちの後、その門前として栄えた志賀郡坂本では琵琶湖岸に坂本城が築かれ、信長から志賀郡の支配を任された義昭の家臣でもある明智光秀が居城としていた。石山城・今堅田城での挙兵は、光秀の支配地域における義昭方の軍事行動でもあった。

・石山城と山岡氏

石山城（大津市）は、琵琶湖南端から流れ出た瀬田川西岸の丘陵端部に立地したと思われる(4)。「石山寺境内領内絵図」（石山寺蔵）には、石山寺門前の塔頭群の南側に「古城」と記載された堀囲みの長方形の区画が描かれており（図2）(5)、付近には「フルシロ」と通称される高い堰堤と堀に囲まれた約二千㎡の土地があったという。

瀬田川対岸の栗太郡瀬田には、十五世紀の中頃に近江国甲賀郡から進出した山岡氏が勢力を持ち、瀬田川に架かる瀬田橋の東岸に瀬田城（大津市）を構え、園城寺光浄院と石山寺に一族の出身者を入れるなど志賀郡の有力寺院に影響を与えていた(6)。『寛政重修諸家

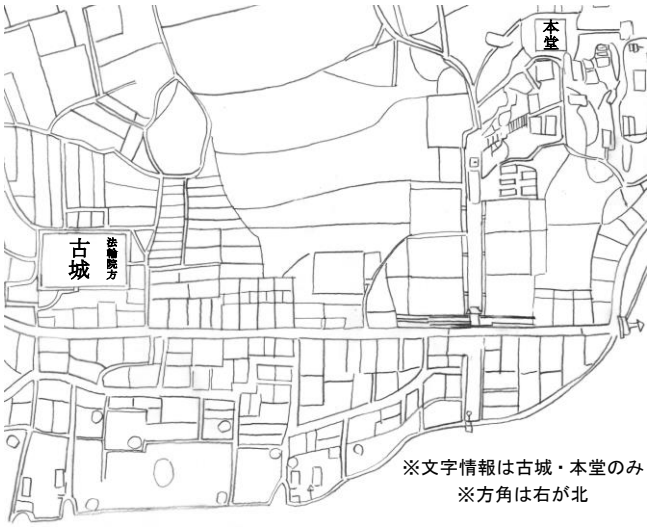

図２「石山寺境内領内絵図」（石山寺蔵、部分。中西がトレース）

譜』によれば、石山城には以前から山岡氏が居住し、後には山岡景猶が入ったという。

瀬田城の遺構は不詳であるが、山岡一族の居城と伝える窪江城（大津市）では、南側が削られるものの三方に土塁をまわす区画と、その北側斜面下には土塁状の地形を伴う平坦面が残存し、およそ五〇m四方の方形館を中心とした城郭構造が想定される（図３）（7）。石山城についても、日常的な支配拠点である方形館を核とした城郭構造が想定することは可能である。

ただし、『信長公記』は「普請半作」と表現し、挙兵に使用した城郭は未完成であったのかもしれない。その場合の石山城は、臨時築城による施設であって、石山寺西側に位置する伽藍山の尾根上で確認された不明確な堀切などとの関係が注目される（8）。現時点において、石山城の詳細を論じることは難しい。

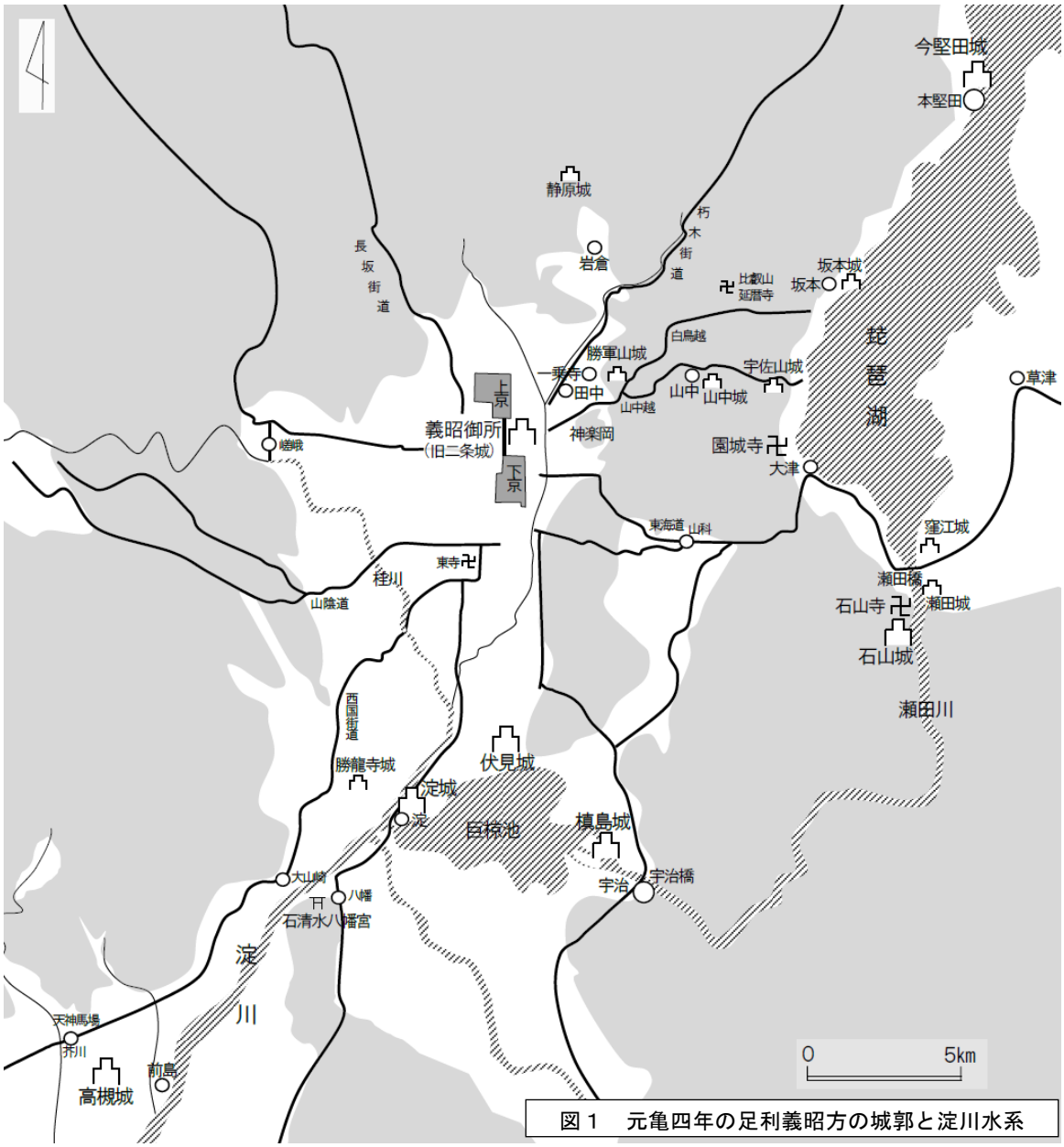

図１　元亀四年の足利義昭方の城郭と淀川水系

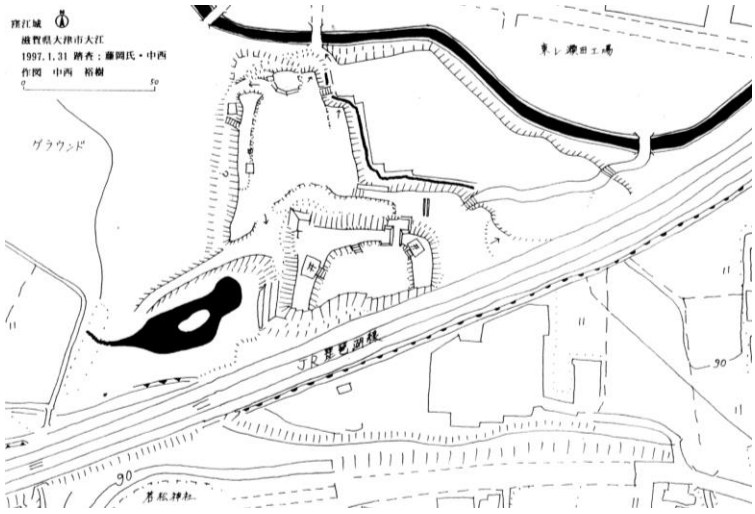

図３　窪江城跡　概要図（中西作図）

石山城の「大将」であった光浄院(暹慶)は、義昭に仕えた園城寺光浄院の僧で、後に還俗して山岡景友を名乗った(9)。信長に仕えた瀬田城主の山岡景隆、窪江城主とされる景佐、後に石山城に入る景猶という三人の兄がいる。景隆は天正三年(一五七五)に信長の命を受け、後の安土城の普請奉行・木村高重と瀬田橋を本格的に架橋し、同十年の本能寺の変では景佐とこの橋を焼き落とした。近江から陸路で京都に向かう際、瀬田橋は通らざるを得ない交通の要衝であり、周辺が山岡氏膝下の地であった。

元亀四年の挙兵時、景隆と景猶は信長方として従軍したが、景隆は元亀元年に敵方の六角氏、元亀四年二月には景猶が敵方の松永久秀への内通が疑われている。信長にとって、山岡氏は全面的に信を置けない勢力だったのだろう。このような一族において、光浄院は義昭から元亀三年に瀬田川が宇治川と名前を変えた河口にあたる上山城(山城国南部。南山城地域)の守護に任命され(10)、宣教師は義昭の「寵臣」と呼んだ(11)。

『信長公記』には、織田勢が「勢田を渡海し、石山へ取懸」とあり、瀬田橋は使えない状況であった可能性がある。また、石山城には「伊賀・甲賀衆」が加わっていた。

かつての近江守護六角承禎・義治父子は、近江南部の甲賀郡・隣国の伊賀国という山間地帯に退き、勢力挽回の機会をうかがっていた。織田勢の瀬田方面の動きに対し、義治は背後を衝く位置にある鯰江城(滋賀県東近江市)へ移り、甲賀西部に拠点を置く三雲成持が瀬田方面から引揚げている(12)。光浄院の挙兵は、六角氏と連動し、要衝・瀬田を押え得る山岡一族にふさわしい動きであるように思う。

・今堅田城と磯谷・渡辺氏

堅田は、琵琶湖の幅が最も狭くなる場所の西岸に面し、中世湖上交通の拠点として栄えた都市的な場である。元亀元年(一五七〇)には朝倉・浅井氏が志賀郡に進出した際、堅田を率いる猪飼・馬場・居初氏らの土豪が信長側に付き、織田勢が堅田に入るが敗北するという合戦が起きていた。

今堅田は、堅田の中心である元堅田の北に位置し、西側の内湖と琵琶湖に挟まれた島状の地形であった(13)。『兼見卿記』に「明智至今堅田手遣、彼在城責落」(14)とあるように、今堅田に城郭が存在したと思われるが、構造などについては不詳である。

この今堅田には、石山城の軍勢に名が見えない「磯貝新右衛門・渡辺」がいた可能性が高い。「磯貝新右衛門」とは磯谷久次、「渡辺」とは宮内少輔を称した渡辺昌という義昭家臣を指しており、ともに明智光秀の与力とされていた(15)。

磯谷氏は、光秀の居城があった坂本から京都に向かう山中越の途中に位置する志賀郡山中の土豪であり、渡辺氏は山中越が京都に入る付近の田中(京都市左京区)から、同じく坂本方面から白鳥越が京都に入る付近の一乗寺(同前)にかけて勢力を持った土豪である。これらのルートを介し、両氏が山城・近江国境にかけて活動したことは推測できるだろう。

ただし、磯谷・渡辺両氏は、堅田の勢力ではない。前年の十一月に推定される光秀の書状では、今堅田での不審な動きに対する志賀郡雄琴の和田秀純の動きが賞されている(16)。彼らは石山に入った光浄院らと歩調をあわせ、今堅田を占拠するような形で挙兵したのであろう。また、堅田にも彼らに通じする勢力がいたことも考えられる。

三　南山城での挙兵と城郭

信長は志賀郡の義昭方を鎮圧し、義昭との関係修復を意図した。しかし義昭は、ついに自身が義昭御所(旧二条城。京都市上京区)に兵を集めて籠城した(17)。元亀四年(一五七三)三月に信長は軍勢を率いて上洛し、義昭御所を囲んだ後に将軍が守るべき上京という都市を焼き討ちした。翌四月、義昭は和睦に応じるが、以後も本願寺らとの連携を深める。一方で、上洛を目指す武田信玄が陣中に没した。

『信長公記』によれば、京都から兵を引いた信長は、近江で六角氏が立て籠る鯰江城を攻め、六角氏を支援した百済寺(滋賀県東近江市)を焼き討ちした後、岐阜城(岐阜市)へと帰った。信長は「公儀右の御憤を休められず、終に天下御敵たるの上、定て湖境として相塞がるべし。其時のために大船を拵へ」という。義昭方が琵琶湖を防衛線にするとみて、信長は多くの軍勢を収容する大船を佐和山城(滋賀県彦根市)の麓で建造した。

七月三日、再び義昭は御所に筆頭家臣というべき三淵藤英、伊勢貞興らを置き、自身は槇島城(京都府宇治市)に移って挙兵した。早速、信長の軍勢は大船で一気に琵琶湖を渡って坂本から入京し、御所に籠もる義昭の軍勢を降伏させた。

『兼見卿記』によれば、十日に「京都御城之衆」が降伏して礼を行い、十二日には柴田勝家の仲介で三淵藤英が退城し、伏見城(京都市伏見区)へ移る(18)。そして七月十六日から槇島城攻撃が始まり、十八日に義昭は降伏する。

・槇島城

槇島城(京都府宇治市)は、宇治川が流れ込む山城国南部(南山城)の巨椋池の中州に存在した。真木嶋氏の本拠であったが、戦国時代には山城国守護が使用する城郭ともなった。真木嶋氏は将軍の奉公衆で、真木嶋昭光は義昭の側近筆頭であった(19)。翌天正二年(一五七四)には、山城国南部の支配を担うべく信長家臣の塙直政が槇島城に入っている。

江戸時代に「古城」と呼ばれた地を含む城跡は小高い地形であったとされるが、直接的な遺構は現地に確認できない(20)。『信長公記』によれば、信長は宇治川対岸の「上やなぎ山」に陣を置き、宇治川を渡河した後、「四方より真木嶋外構乗破り焼上げ」、義昭が「是に過ぎたる御構これなし」と考えた城郭を落としている。また、信長は上杉謙信への書状で宇治川を乗り渡って「外構」を打ち破り「本城」を攻め崩したと述べている(21)。詳細は不明ながらも、槇島城は本城-外構という二重の空間を持つ構造であったと思われる。

『信長公記』によれば、織田勢による宇治川の渡河は宇治の平等院付近で行われた。宇治は京都と奈良を結ぶ奈良街道の渡河点で、宇治川と巨椋池の結節点として発展した都市である。宇治橋は弘治二年(一五五六)に三好氏の武将・松永長頼(内藤宗勝)が新造していたが(22)、今回の信長勢は渡河している。宇治橋が使えない状況であった可能性があり、それを扼するような位置にある槇島城の義昭方がそのような対応を取っていた可能性があるだろう。

・伏見城と淀城

先述のように、義昭の挙兵時、三淵藤英は義昭御所から伏見城へと移ることになった。伏見は、京都の東山から南に続く丘陵と巨椋池が接する場所で、やはり水陸交通の結節点であった。伏見荘という荘園があり、鎮守である御香宮の神主三木氏や小川氏が守護被官でもある土豪として活動していた(23)。

応仁・文明の乱後の伏見では、近江から来たと推定される津田氏が金融活動や交通に関わる活動を開始する(24)。また、永正五年(一五〇八)には、入京を目指す細川京兆家の細川高国が「伏見ノ津田兵庫助カ城ニ楯籠」とある(25)。

永禄十一年(一五六八)に義昭が将軍となった後、どこかの時点で三淵藤英が伏見城を得たようである。元亀三年九月には伏見での滞在が確かめられ、翌元亀四年三月十一日には京都の吉田神社の吉田兼見が伏見に藤英を訪ねている(26)。御香宮の東側で行われた発掘調査では堀と土塁が検出され、三淵氏の伏見城との関連が示唆されている(27)。しかし、現時点では論拠に乏しく、城郭の場所や構造などは不明とせざるを得ない。なお、義昭の敗北後、三淵藤英は信長に従い、後に切腹を命じられた。

さて、義昭が槇島城で兵を挙げた際、京都周辺では家臣らが城郭に楯籠り、義昭没落後も持ち堪えた。以下、『信長公記』よれば、渡辺昌と磯谷久次が本拠の一乗寺に築いた「足懸り」、京都の北に位置する岩倉周辺(京都市左京区)を拠点とした山本対馬守の静原城(同前)(28)、そして、かつて義昭と対立した三好三人衆の石成友通が三好氏旧臣の番頭大炊頭、幕府奉行人の諏訪飛騨守らを率いて籠もった淀城(京都市伏見区)である。

しかし七月二十三日に一乗寺の渡辺らが降伏し、翌日に明智光秀の軍勢が静原城、二十七日に細川藤孝の軍勢が淀城への攻撃を開始する。淀城では、番頭・諏訪氏が羽柴秀吉の勧誘で降伏し、八月二日になって友通は戦死した(29)。山本対馬守は光秀の調略で殺され、十月に首が信長へと進上された。

このうち、淀城は、槇島城・伏見城と同様に巨椋池に臨む場所に存在した。淀津は、桂川・宇治川・木津川が合流する巨椋池西端に位置する京都の外港である都市的な場として発達していた(30)。淀では石清水八幡宮(京都府八幡市)の神人が活動する一方、隣国の摂津との関りも深く、永正元年(一五〇四)には摂津守護代・薬師寺元一が主家の細川京兆家に対して淀で挙兵しており、その際に「藤岡の本城」(31)、「淀外城」(32)が記録にみえる。

この後は丹波出身かと思われる小畠氏が淀で勢力を伸ばして城郭を構え、永禄元年(一五五八)までには細川氏綱が入った。以降、淀城は守護が

いるべき山城国内の中心城郭という認識されていく。

戦国時代の淀城の構造などは不詳であり、明確な遺構も残らない。先の「本城」「外城」の表現をふまえると、淀には複数の城館が存在した可能性がある。すでに元亀三年に義昭は、淀に「新城」の普請に取りかかっていた(33)。槇島城との距離や有力武将の石成友通が他の武将を従えて入城した点などから、淀城は槇島城に準じる場になっていたと思われる。

四　まとめ

元亀四年の挙兵に伴う足利義昭方の城郭について、その構造等は明らかにし得なかったが、琵琶湖-瀬田川・宇治川-巨椋池という淀川流域に分布し、石山-瀬田、堅田や槇島-宇治、淀という水陸交通の要衝・結節点、また都市的な場と重複・隣接する立地であったことは確認できた。その大半が平城で、直接水面に接する事例は少ないものの「水城」のイメージでとらえるようにも思う。家臣と城郭を通じ、義昭が淀川水系の軍事的要衝を押えようとしていたとの推定は許されるだろう。

淀川水系は、東西日本を結ぶ交通の大動脈であり、後の豊臣政権は天正十一年から河口に近い淀川(大川)べりに本城・大坂城の工事をスタートさせ、続いて淀城と近江国志賀郡の港町・大津に大津城を整備した。天正二十年からは、豊臣家の家督を退いた秀吉の居所として伏見(指月)城の築城を開始し、文禄三年以降は宇治や淀の港湾・交通機能を伏見に集める「太閤堤」を構築する(34)。

これら豊臣政権の城郭は、淀川水系を介した経済掌握という目的が大きく、そもそも元亀四年の義昭方の城郭とでは規模にも大差がある。しかし、淀川水系を押さえる着眼点は同じであり、これを曲がりなりにも実現した将軍義昭の実力は注目に値するように思う。

さて、元亀四年二月に湖南、七月には南山城で義昭方の城郭が機能したが、この間の三月初旬に高山飛騨守・右近による高槻城簒奪が実行され、和田惟長は三渕藤英がいる伏見城へと逃れた(35)。高山氏は、摂津最大勢力の荒木村重に通じ、村重は三月二十九日に上洛する信長を待ち構えて臣従を明確にした。一方、惟長の父・惟政は義昭の重臣であり、逃れた伏見には三淵藤英の城があった。高槻城簒奪事件は、義昭・信長の対立を受けたものでもあった。

高槻城は、淀川から約二㎞離れた場所に位置するが、北の山間部と都市が展開する西の平野部からの陸路が合流し、淀川の前島浜(高槻市)へと向かう地点となっている(36)。後の元禄四年(一六九一)、江戸に向かう長崎のオランダ商館のエンゲルト・ケンペルによれば、淀川左岸に面した枚方からは水中に築かれたような美しい高槻城が野原の中に際立って見えたという(37)。

高槻から淀川を下れば、後に大坂城が築かれた大坂本願寺に到り、当時の義昭は本願寺との関係を強化していた。元亀四年の政治状況をふまえると、和田氏段階の高槻城は、義昭方が淀川水系を押さえる拠点の一つとして機能した可能性を指摘しておきたい。

【註】

(1)中西裕樹『中世武士選書41　戦国摂津の下克上　高山右近と中川清秀』(戎光祥出版、二〇一九年)など。

(2)当該期の政治的状況については、主に久野雅司『中世武士選書40　足利義昭と織田信長 傀儡政権の虚像』(戎光祥出版、二〇一七年)、柴裕之『図説　明智光秀』(戎光祥出版、二〇一九年)を参照した。

(3)以下『信長公記』については、奥野高広・岩沢愿彦 校注『信長公記』(角川書店、一九六九年)を使用した。

(4)『ふるさと大津歴史文庫2　大津の城』(大津市史編さん室、一九八五年)、『戦国の大津 - 天下統一の夢、坂本城・大津城・膳所城 - 』(大津市歴史博物館、二〇〇七年)。また、石山城などの瀬田川筋の城郭については、松浦俊和「川と道を見据えた城郭配置 - 瀬田川筋の中・近世城郭群 - 」(「琵琶湖がつくる近江の歴史」研究会編『城と湖と近江』、サンライズ出版、二〇〇二年)がある。

(5)『古絵図が語る大津の歴史』(大津市歴史博物館、二〇〇〇年)に所収。

(6)山岡氏については、井上優「近江湖南の山岡氏」(『栗太武士の足跡 - 山岡一族とその周辺 - 』(栗東歴史民俗博物館、一九九六年)に多くを学んだ。

(7)窪江城は、東レエンジニアリング株式会社・瀬田工場の敷地内にある。著者は、一九九七年一月に同工場からご許可を頂戴し、藤岡英礼氏とともに調査し、城跡の概要図(縄張り図)の作成を行った。掲載した図は、その際に作成したものである。

(8)長谷川銀蔵「石山城」(『滋賀県中世城郭分布調査報告9(旧滋賀郡の城)』、滋賀県教育委員会・近江城友の会、一九九二年)。長谷川氏は「遺構はお世辞にも明確とはいい難く、堀切・竪堀等だけが印象的であった」としている。

(9)谷口克広『織田信長家臣人名辞典 第2版』(吉川弘文館、二〇一〇年)。

(10)『兼見卿記』元亀三年五月八日条(史料纂集)。

(11)一五六九年七月十二日付 ルイス・フロイス書簡(十六・七世紀イエズス会日本報告集)。

(12)(元亀四年)三月二十九日付 六角承禎書状写(「水口宿池田文書」)。新谷和之「戦国期近江三雲氏の動向-大名権力と惣国一揆の接点-」(大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第23号、二〇二〇年)を参照。

(13)註4を参照。

(14)『兼見卿記』元亀四年二月二十九日条(史料纂集)。

(15)註9を参照。

(16)(元亀三年)十一月十四日付 明智光秀書状(「和田家文書」)。藤田達生・福島克彦編『明智光秀 史料で読む戦国史』(八木書店、二〇一五年)を参照。

(17)義昭御所(旧二条城)は天主を備え、本格的な石垣を伴う平地の城館であった。京都市文化財保護課編『京都市文化財ブックス第31集 天下人の城』(二〇一七年)に過去の発掘調査成果を含め、その概要がまとめられている。なお、この城郭は信長の城として扱われることが多く、確かに工事に際しては信長が陣頭指揮を執っている。ただし、城郭の主体は将軍足利義昭であり、著者は織田氏の城郭とするよりも、室町将軍、もしくは京都という地域の城郭系譜としての評価を重視すべきだと考える。

(18)『兼見卿記』元亀四年七月十日条・十二日条。

(19)真木嶋昭光については、木下昌規「鞆動座後の将軍足利義昭とその周辺をめぐって」(同氏『戦国期足利将軍家の権力構造』、岩田書院、二〇一四年)を参照。

(20)福島克彦「槙島城」(仁木宏・福島克彦編『近畿の名城を歩く』滋賀・京都・奈良編、吉川弘文館、二〇一五年)。

(21)(元亀四年)八月二十日付 織田信長書状(「本願寺文書」。奥野高廣『織田信長文書の研究』上巻)。

(22)『厳助往年記』(改訂史籍集覧)。

(23)坂田聡・榎原雅治・稲葉継陽『日本の中世12 村の戦争と平和』(中央公論新社、二〇〇二年)を参照。

(24)伏見の津田氏については、馬部隆弘「伏見の津田家とその一族」(『大阪大谷大学歴史文化研究』第18号、二〇一八年)。

(25)『瓦林政頼記』(改訂史籍集覧)。

(26)『兼見卿記』元亀三年九月十三日条、『同』元亀四年三月十一日条、

(27)福島孝行「三淵氏伏見城跡」(『京都府中世城館跡調査報告書』第3冊-山城編1-京都府教育委員会、二〇一四年)。

(28)註9を参照。

(29)『年代記抄節』(大日本史料)。

(30)以下、淀に関しては馬部隆弘「淀城と周辺の地域秩序-新出の中世土地売券を手がかりに-」(『古文書研究』第八一号、二〇一六年)。

(31)『九条家文書』九-一五号(図書寮叢刊)。

(32)『後法興院記』永正元年九月十九日条(増補 続史料大成)。

(33)『兼見卿記』元亀三年二月十日条。

(34)以降の織田政権、豊臣政権の城郭と淀川水系との関わりについては、中西裕樹「城郭史上における指月伏見城-織田・豊臣政権の城郭と港湾-」(小和田哲男先生古稀記念論集刊行会編『戦国武将と城』、サンライズ出版、二〇一四年)を参考されたい。

(35)『兼見卿記』元亀四年三月十九日条、一五七三年四月二十日付 ルイス・フロイス書簡。

(36)江戸時代初期の高槻城と周辺を描いた「摂州高槻絵図」(個人蔵・亀岡市文化資料館寄託)には、城下の「前島口」から淀川の川港があった前島浜へと向かう直線道路が明確に描かれている。『高槻城築城400年記念特別展 天下泰平と高槻城』(高槻市立しろあと歴史館、二〇一七年)に所収。

(37)エンゲルベルト・ケンペル 斎藤信 訳『江戸参府旅行日記』(東洋文庫三〇三(平凡社、一九七七年)。

発行日 二〇二〇年十二月三十一日 **編集・発行** 高槻市立しろあと歴史館
大阪府高槻市城内町一番七号・TEL〇七二(六七三)三九八七
◆ホームページ:高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載
http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html